はだしのゲンわたしの遺書

著　中沢啓治
朝日学生新聞社

生きる力
敗戦後の日本
原爆

紹介文

『はだしのゲン』の作者中沢啓治さんは，1939 年生まれで，原爆で父，姉，弟，妹を亡くしました。その後に母を亡くし，その死をきっかけに初めて原爆をテーマにした『黒い雨にうたれて』を書き，『はだしのゲン』の連載を開始しました。この本には，原爆で家族を亡くして，母とともにゼロから再出発した，中沢さんの不屈の人生が書かれています。

真庭市立落合中学校２年

この本は，漫画『はだしのゲン』の作者中沢啓治さんの自伝です。中沢さんの言葉で語られる戦争や原爆の体験を通じて，『はだしのゲン』の内容が，さらに胸にせまってきます。

作成委員

～広島の原爆～

『ぼくは満員電車で原爆を浴びた
11 歳の少年が生きぬいたヒロシマ』
語り　米澤鐵志
文　由井りょう子
小学館

『絵で読む広島の原爆』
文　那須正幹
絵　西村繁男
福音館書店

『八月の光』
作　朽木祥
偕成社

『ぼくは満員電車で原爆を浴びた：11 歳の少年が生きぬいたヒロシマ』は，語り部の米沢さんが，ご自身の体験を，子どもの目線で語っています。原爆投下の実情を，原爆投下前の広島の暮らしからその後まで，絵とデーターとでわかりやすく解説した絵本『絵で読む広島の原爆』とあわせて読むと，『はだしのゲン』の内容が，いっそうよく理解できます。『八月の光』は，原爆で大切な人々を失いながらも，生き残った少年少女の３つの物語です。著者も被爆二世で，実際にあった話を元に書かれています。死んでいった人々の苦しみと，残された人々の苦しみ，そしてそれをずっと記憶することが大切だと著者は言っています。

永遠の0

著　百田尚樹
太田出版
(C) 百田尚樹／太田出版

命の大切さ
太平洋戦争
愛の物語

紹介文

『永遠の０』は，ゼロ戦に乗って闘った若者たちの話です。太平洋戦争が終わりに近づいてくると，ベテラン搭乗員たちにまで最悪の命令が下されます。それは，戦闘機でアメリカの軍艦めがけて激突する「特攻作戦」。驚くことに，その特攻作戦に参加した人の最少年齢は 17 歳でした。僕たちは，この人たちはもちろん，戦争で亡くなられた方々の分まで，精一杯生きていかなければならないと思わせてくれる本です。

岡山市立西大寺中学校３年

現代を生きる姉と弟の兄妹が，自分の祖母の死をきっかけに，かつて祖母が，今の祖父ではないある男性と結婚していた事実を知ることからストーリーが始まります。その男性は「宮部久蔵」といい，人一倍警戒心が強く，戦争で生き残ることを至上命題として知恵を絞って戦っていました。妻と再会するまでは，絶対に死ねないと思っていたからです。そういう彼がなぜ，身代わりの死を選んだのか。考えてみなければならない謎です。

岡山市立西大寺中学校３年

～戦時下の青春～

『15 歳の志願兵
ジュニア版 NHK スペシャル』
脚本　　大森寿美男
文・構成　ひろはたえりこ
汐文社

『花や咲く咲く』
著　あさのあつこ
実業之日本社

『夕凪の街　桜の国』
著　こうの史代
双葉社

戦況の悪化による兵力不足を補うために，愛知の旧制中学校で決起集会が開かれました。軍人の話を聞いて正義感に燃え，全校生徒が航空兵に志願した話をドラマ化し，それを小説にしたものが『15 歳の志願兵』です。『花や咲く咲く』は，戦時下の四人の女学生の友情物語です。すさんでいく時代の中でも，今の皆さんと同じように喜んだり悲しんだりする姿が，生き生きと綴られています。『夕凪の街　桜の国』は原爆投下で被爆した女性の10 年後と，現代に生きる彼女の親族の物語です。何年経っても癒えない心の傷を漫画で描いています。

ぼくのこえがきこえますか

作　田島征三
童心社

絵本だからこそ
怒りと悲しみ
命

紹介文

　これは，とても悲しいし怖い絵本です。行きたくないのに戦争に行かされて，鉄砲をうちたくないのにうたされて，それでいてひどい死にかたをしてしまいます。戦争でたった一つの命を失った人たちの怒りが，絵と文とで迫ってきます。中学校で平和について学んだあとに読むと，とても理解が深まります。分からなかったことも，この絵本を読んで分かることもあると思います。

岡山市立西大寺中学校３年

　中学生になって，すっかり絵本から遠ざかっている人も多いと思います。しかし絵本だからこそ伝わるものはたくさんあります。この絵本は言葉は少ないけれど，迫力のある絵から，戦死した多くの人の怒りや悲しみが伝わってきます。

作成委員

～絵本でも～

『エリカ　奇跡のいのち』
文　ルース・バンダー・ジー
絵　ロベルト・インノチェンティ
訳　柳田邦男
講談社

『紅玉』
文　後藤竜二
絵　高田三郎
新日本出版社

『さがしています』
作　　アーサー・ビナード
写真　岡倉禎志
童心社

　『エリカ　奇跡のいのち』には，第二次世界大戦中に強制収容所に送られる列車の中で，自分たちの赤ちゃんを助けるためにユダヤ人の両親がした驚くべき事実が，暗い絵でつづられています。戦争中，たくさんの朝鮮や中国の人々が，強制連行されて日本の炭鉱などで過酷な労働を強いられていました。彼らと北海道のリンゴ農家を描いているのが『紅玉』です。『さがしています』は，写真絵本です。広島の原爆資料館の被爆した展示品が，静かに原爆の悲しさを語っています。原爆でそれぞれが失ったものを，今でも探し続けています。語り部となった展示品の声に，耳を傾けてみましょう。

ひめゆりの沖縄戦 ―少女は嵐のなかを生きた

著　伊波園子
岩波書店

悲しい友情
沖縄戦
護師

紹介文

沖縄戦に看護師として従軍した女学生たちの，悲しいけれど心打たれる深い友情の話です。ぼくがこの少女だったら，すぐに死んでいたかもしれません。この少女たちはりっぱだと思います。ぼくは沖縄に行って，ひめゆりの塔に行ったことがあります。そのひめゆりの塔にも，この本に書かれていたことが書いてありました。戦下での命がけの友情は，涙なしには読めません。

倉敷市立玉島北中学校１年

太平洋戦争の末期に，日本国内唯一地上戦となったのが沖縄です。島民の４人に１人，９万人以上が死にました。「ひめゆり」とは当時の沖縄県の女学生で結成されたひめゆり学徒隊のことで，陸軍病院に看護要員として勤務しました。アメリカの砲撃をかいくぐって移動し，終戦時にはひめゆり学徒隊の約３分の２が亡くなっています。

作成委員

～かつて日本が～

『綾瀬はるか「戦争」を聞く』
編　ＴＢＳテレビ『ＮＥＷＳ23』取材班
岩波書店

『屋根裏部屋の秘密　直樹とゆう子の物語』
著　松谷みよ子
絵　司修
偕成社

『それでも，日本人は「戦争」を選んだ』
著　加藤陽子
朝日出版社

女優の綾瀬はるかさんが，戦場となった沖縄はもちろん広島，長崎，ハワイ，そして東北に行き，戦争体験を聞いたテレビ番組を本にまとめたのが，『綾瀬はるか「戦争」を聞く』です。綾瀬さん自身が広島出身で，胸にしまったつらい記憶を，寄り添いながら聞いている様子が伝わります。祖父の遺言で，屋根裏部屋のダンボール箱を開けたエリコ。そこには，生前に祖父が決して語れなかった秘密が隠されていました。それが『屋根裏部屋の秘密』です。これには，加害者であった日本が描かれています。日清戦争から太平洋戦争まで，日本がなぜ戦争を選択してきたのか，それを幅広い視点で説明しているのが，『それでも，日本人は「戦争」を選んだ』です。この本は中高生に話した講義録なので，難しい内容がわかりやすく語られています。

弟の戦争

作　ロバート・ウェストール
訳　原田勝
徳間書店

戦争のおそろしさ

イラク戦争

憑依（ひょうい）

紹介文

この本の作者のロバート・ウェストールさんは，イギリスの美術教師でした。この物語は，主人公ぼくの弟が，行ったこともないイラクの少年兵にとりつかれ，もう一人の人格と重なってしまうという話です。遠くにあるはずの戦争が，現代の家族に迫ってくる迫力のある物語です。自分たちとは無縁のものだと思っていた戦争のおそろしさを，改めて感じさせられる作品です。

倉敷市立玉島北中学校１年

～戦争に利用される子どもたち～

『リトル・ソルジャー』
作　バーナード・アシュリー
訳　さくまゆみこ
ポプラ社

『ヒトラー・ユーゲントの若者たち』
著　S．C．バートレッティ
訳　林田康一
あすなろ書房

『ぼくは 13 歳　職業，兵士。
あなたが戦争のある村で生まれたら』
著　鬼丸昌也，小川真吾
合同出版

皆さんと同年代の子どもたちが，戦争に直接関与させられた本を取り上げました。『リトル・ソルジャー』は，アフリカで少年兵として戦っていた少年が，保護されてロンドンに来てからの葛藤を描いた小説です。『ヒトラー・ユーゲントの若者たち』は，かつてのドイツで，ヒトラーにあこがれて，ナチスの非人道的な活動に積極的に加わった少年たちのノンフィクションです。『ぼくは 13 歳　職業，兵士』には，紛争地域で，小型兵器を持たされて今でも戦わされている子どもたちの現状が書かれていています。

ジャック・デロシュの日記
隠されたホロコースト

作　ジャン・モラ
訳　横川晶子
岩崎書店

拒食症
ユダヤ人虐殺
隠された真実

紹介文

この本の主人公のエマは，拒食症の少女です。彼女は大好きな祖母の家で，一冊の日記を見つけます。それは，強制収容所でユダヤ人虐殺の指揮をしていた男のものでした。たくさんの人を残虐に殺しながらも，あたかも他人事のように書かれた日記に，エマは衝撃をうけます。そしてなぜこれを祖母が持っていたのか，謎解きのように物語が続いていきます。

過去の虐殺の日記と，それを受け止められず拒食症が悪化していく現代のエマが，交互に描かれていきます。そしてそれが意外な方向へと結びついていくのです。

作成委員

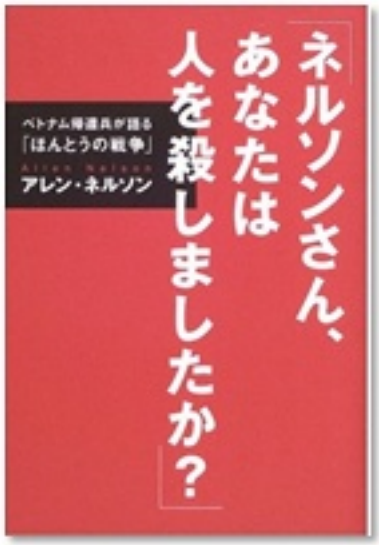
～外国の小説から～

『灰色の地平線のかなたに』
作　ルーター・セペティス
訳　野沢佳織
岩波書店

『生きのびるために』
作　デボラ・エリス
訳　もりうちすみこ
さ・え・ら書房

『戦火の馬』
著　マイケル・モーパーゴ
訳　佐藤見果夢
評論社

『灰色の地平線のかなたに』は，ソ連に占領されたリトアニアに住む 15 歳の少女リナが，シベリアに送られて，飢えと寒さと強制労働に苦しむ物語です。『生きのびるために』は，民衆，とりわけ女性に厳しいアフガニスタンのタリバン政権下で，力強く生き抜いていく少女らの物語です。『戦火の馬』には，第一次世界大戦で，イギリスから戦馬として戦地に送られた馬のジョーイから見た戦争の悲惨さが描かれています。



「ネルソンさん，あなたは人を殺しましたか？」

ベトナム帰還兵が語る「ほんとうの戦争」

著　アレン・ネルソン

講談社

戦争の傷

ベトナム戦争

家族の助け

紹介文

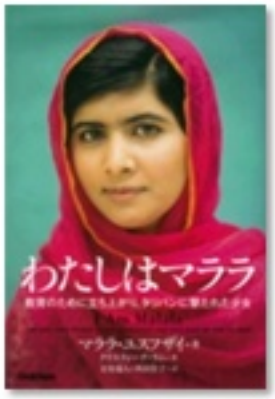
戦地から帰っても戦争が終わっても，兵士にとって戦争はずっと続いていくことを，この本を読んで知りました。ベトナム戦争から帰ってきたネルソンさんは，戦地での記憶に苦しみ続けます。戦争とは人を殺すことであり，殺された者も殺した者も被害者だと思いました。

朝日塾中等教育学校１年

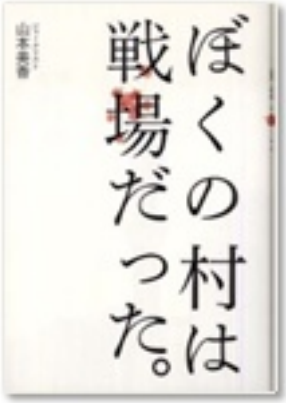
著者は 1965 年に 18 歳でベトナム戦争に行き，アメリカ兵として戦いました。「ネルソンさん，あなたは人を殺しましたか。」これは小学生に戦争体験を語った著者が，最後に小学生から質問された言葉です。この言葉から，自分が戦地でしてきたことに向き合うことを決意します。

作成委員

～ノンフィクション－さまざまな現実～



『わたしはマララ
教育のために立ち上がり、
タリバンに撃たれた少女』
著　　マララ・ユスフザイ
　　クリスティーナ・ラム
訳　　金原瑞人，西田佳子
学研パブリッシング



『ぼくの村は戦場だった。』
著　山本美香
マガジンハウス

『さよなら紛争
武装解除人が見た世界の現実』
著　伊勢崎賢治
河出書房新社発行

『わたしはマララ』は，宗教的に女子が抑圧された社会で，「女子も学びたい」と訴えて銃撃された少女の手記です。一命をとりとめて，今も活動しています。世界各地の紛争地の人々の生活を記したのが『ぼくの村は戦場だった』です。この本の著者は，シリアで取材中に銃殺されました。『さよなら紛争』の著者は，シエラレオネなどの紛争地に赴き，武装解除をしてきた人です。国際紛争の原因や現状がよくわかり，平和のために私たちができることを考えさせる本です。